

毎日歌壇

伊藤 一彦 選

人の顔ちゃんと見てない人が増え監視カメラが読みとる表情 国立市 佐藤 建
 △評▽事件が起きたときに詳しい映像を取り出せる監視カメラ。表情はもちろん心の中まで読みとられる時代が近づいているか。
 気がつけば今日は「はい」しか言っていない服も全身灰色だった 横浜市 砂月 七
 △評▽若い人が一日を振り返り詠んでいる。厳しい外界に囲まれている苦しい歌だ。
 秋の夜のしずかな雨は疾走を終えたるあとの息のような音 仙台市 石川 初子
 古書店のある通りにはラーメンと書かれた赤いのれんが似合う 松原市 たりりすむ
 さよなら夕焼けののちの空の色に日子と呼ぶべき君を消しゆく 岐阜 椿 久美
 プランコを外してしまった公園は「二号空き地」と名称替えた 札幌市 橋 晃弘
 爆撃に震へるをさなの眼の哀しカメラの向かうの私を見つむ 鹿嶋市 大熊佳世子
 ガザ地区の空爆の跡モノクロにあらず空のみ淡き色をもつ 沼田市 山崎 杜人
 生きてあるかき鬱屈ついでくるヒント探しに床屋へ向かう 延岡市 河野 正
 名前とは記号やナンバーではなくて言葉の宿るものではないのか 久喜市 長谷川幸子

米川千嘉子 選

除草剤撒かれし草は枯れ果ててその手我をも枯らさむとせむ 三条市 高橋 実子
 △評▽「その手」は除草剤をまいた人の手だと解した。除草剤を使う発想はそのまま人間の命を軽視する思想なのでは、と。
 泣くまいとするときその目は光りだす異国の河の水をたたえて 京都市 小池ひろみ
 △評▽わが感情にあらがおうとする時にあふれ出てくる涙の比喩が美しい。
 映画化をされし小説読みふかし若者の中に飛び込んでゐる 幸手市 中村 早苗
 ウクライナ兵を治療する医師はつらかつら帰して死線をさまよふならば 静岡市 柴田 和彦
 夕ごとに「もう帰ります」といふ婦人いのちの夕をホームは見守る 広島市 満尾 恭子
 昭和二十三年入学式の教科書の薬の匂いの今に鮮明 福知山市 阪梨 義春
 うつ伏せ寝以前はずっとそうだった片胸無くし仰向けに慣れ 見附市 岡村 文字
 都会から帰郷せる友と酒を飲む零れる酒を妻の拭きいて 日南市 宮田 隆雄
 百年も早く生まれた伊藤野枝談の師に乗り移りたり 筑紫野市 桂 仁徳
 種なしの葡萄に小さき種ありて手放した夢のように静か 仙台市 石川 初子

加藤 治郎 選

最後まで一番長い青色のクレヨン みんな地下で生まれて 大津市 世田 夏雪
 △評▽子どもがクレヨンで絵を描く。青空がないから青色は使わないのだろう。みな核シエルターで生まれたのだと想像する。
 折ってある頁の意味がわからない二十歳の頃の森を彷徨う 東京 稲山 博司
 △評▽その頁にどんな意味があったのか。20歳の頃の自分に帰って思索は続くのだ。
 ただたただた空が青く目が痛いもうすぐ夏の終わりの午後の 宮古島市 塩見 伴
 パーキング「空」が「空」に見えるのは私の心が自由になる日 名古屋市 外山 雪
 よだれ拭くハンドタオルが必要と連絡ありて施設へ急ぐ いわき市 吉田 健一
 ささなみが手招きしてる怖かった辛くて死にたくて海へきたのに 川越市 松永 渚
 所有者の意向によってエックスやワイが流れる水道管に 川崎市 船山 登
 早生まれのような煙に包まれてあなたのこと好きたとすれば 奈良市 古井さらさ
 似てゐない部位を重ねるのこりではできないことを数へてばかり 陸前高田市 藤田ゆき乃
 窓開けて夕陽入れれば何もかも蒸発させるなみだ三粒 横浜市 高橋 理恵

水原 紫苑 選

音楽をやめたあなたの音楽のふたごのような幻聴がくる 花巻市 永汐 れい
 △評▽「音楽」も「幻聴」も、「あなた」さえもメタファーのように思われる美しい一首。「ふたご」のみがリアル。
 古書店でおとぎ話の残酷を分けあうようなキスを明日も 三鷹市 菅原 海春
 △評▽おとぎ話の中で何度も死んだ人々のように、明日も生きてキスをかわす私たち。
 酒蔵に酵母のために流さるるアイネ・クライネ・ナハトムジーク 倉敷市 中路 修平
 晩餐のフォークが落ちて信心の清さを破るような音する 千葉市 星野 珠青
 舞い上がる綿毛を追ってうなだれるあの穂はなにを糧に生きたら 中国 岸 志帆利
 庭がシャツ着てるみたいに薄い雪落ち着いちやうなまた話せたら 横浜市 永永 キヌ
 ずぶ濡れで抱き合うように重なったセミの死骸は悲劇だろうか 尼崎市 入間しゅか
 くらやみをわしこんでいるイヤホンばかりそのの蓋のような蓋 岩沼市 アナコンダにひき
 言いさした言葉のひとつひとつにも水の星は漂っていた さいたま市 雨谷 詩穂
 眼は水面 駆けだす馬を見つめると眩しくてつい水が溢れる 枚方市 久保 哲也

投稿規定 はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます